

アマガミ水泳のお兄さん

ニャン吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

七咲逢にとって兄のように思う相手がいたらの話。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
16	12	9	5	1

第1話

輝日南小学校4年1組

「はい！皆さん、今日はこのクラスに転校生がやってきます。それじゃあ入ってきて。」

そう言われて僕は教室に入った。

黒板に

東堂深夜

と書いて自己紹介をする。

「山梨県から来た東堂深夜です。」

えっと水泳が得意です。

これからみんなと仲良く出来れば嬉しいです。

これからよろしくお願いします。」

そう言うのと皆が拍手で迎えてくれた。

「東堂君の席は塚原さんの隣の空いてる席ね。」

そう言つて後ろから2番目の窓側の空いてる席を指差しで教えてくれた。

席に着くと

「よろしくね。東堂君。私は塚原響っていうの。」

私も東堂君と同じで水泳が得意なの。よかったら今度体験に来ない？。」

「塚原さん。ごめん。僕、今日から輝日スイミングスクールの選手コースに通う事になってるんだ。それと僕の事は深夜でいいよ。塚原さん。」

「私の事も響でいいよ。それにしても偶然。私も輝日スイミングスクールの先輩コースに通ってるのよ。」

「そうなんだ。なら、今日からスイミングスクールでもよろしく。」

「こちらこそ。」

こうして僕の転校先での初日を終えた。

.....

「深夜！手続きがあるから早めに行くわよ！」

「わかってるよ。母さん！」

今日は最終の続きがあるから早めにスイミングスクールへ向かう事になった。

・・・

手続きを終えると開始15分前になっていた。

更衣室で着替えてプールサイドに向かうと先生らしい人が手招きをする。

「今日からこのスイミングスクールに通う東堂深夜君だ。彼は自由形の選手だから自由形の皆は特に仲良くするように。それじゃあ準備体操を始めるぞ。」

こうして僕のスイミングスクールの初日が始まった。

なんでも小学四年生は僕と響だけのようだ。

そしてこの選手コースは上級生が後輩に教える事になっており僕も六年生の先輩に教わりながら実力を付けていき、僕と響は同学年の大会では何度も全国大会に出たり上位に入賞したりした。そしてもうすぐ六年生になる時期に僕に後輩が一人ついた。

七咲逢ちゃんだ。

僕と同じように自由形に入ってきたので自分も負けない様にでも精一杯教えた。

教えるようになってから1ヶ月、僕と響は6年生になり、七咲さんは4年生になった。

同じ小学校だったのでたまに響と僕、七咲さんの3人で帰ることもあった。

「七咲さん。今日はとりあえず大会が近いから4種1通り泳ごうか。僕も隣のレーンで泳いでるから終わったら声をかけてね。」

「深夜君。」

「どうしたの七咲さん？」

「これからは私の事を逢って呼んで。」

「いいけどどうしたの？」

「なんかお兄ちゃんみたいで優しいからそう呼んで欲しい。それとこれから深夜お兄ちゃんって呼んでいい？」

「構わないぞ。それじゃあさつき言ったとおりに1通り泳いでみようか逢。」

「うん。」

こうして僕と逢は自由形の4種を泳ぎ終えてから更衣室で着替え
て帰りの支度をする。

帰り支度を終えていつもの様に響と帰ろうとすると後ろから僕を
呼ぶ声が聞こえる。

振り返ると逢が飛び込んで来た。

「深夜お兄ちゃん。一緒に帰ろ！」

「いいぞ。隣にいる響も一緒にいるけどいいか？」

「休み時間にいつもお兄ちゃんが話してるつり目のお姉さんだ。いいよー！」

「なら、一緒に帰りましょ。それにしても深夜つてずいぶんと好かれ
てるのね。」

「それをお前が言うかよ。響も後輩に好かれてるだろ。」

「そうね。それと大会は大丈夫そうなの？」

「俺の事か？それとも逢か？」

「2人ともよ。私は問題ないわ。後輩も1年間教えてるだけあって大
分いいわよ。」

「そうか。俺も問題ないよ。逢は初めての大会だからな。リラックス
出来れば問題ないよ。」

そう言つて俺は逢の頭を少し強めに撫でた。

「お兄ちゃん。痛い。撫でるならもつと優しくして。」

「ごめんごめん。」

と軽く謝るとムウーと頬を膨らまして怒っている様に見せるの
だった。

家に帰る途中、俺と逢ハイスクール響と別れ逢を家に送るのだつ
た。

逢の家に着くと

「お兄ちゃん。今度お家に遊びに来てよ。」

「そうだな。今度な。」そう言つて今度は優しく逢の頭を撫でている

と、

「2人は仲がいいわね。」

「あれ？お母さんどうしたの？」

「お買い物から今帰ってきたのよ。それと隣は誰かしら？」

「えつと俺は・・・僕は逢ちゃんのスイミングスクールの上級生で東堂深夜です。」

「あら。いつもありがとうね深夜君。そう。あなたが深夜お兄ちゃんなのね。」

「えっ？」

「いつも逢がね深夜お兄ちゃんは「お母さんやめて！」あら。なんでかな？」

「恥ずかしいから！」

「そうなの？でも安心したわ。家だと郁夫の為に姉ちゃん頑張ってるもんね。深夜君。今度是非遊びに来てね。それと大会も見に行くから頑張ってね。」

「はい！ありがとうございます。それと大会が終わったら遊びに来ますね。」

「そうね。いらっしやい。」

「ありがとうございます。それじゃあね。逢。」

こうしてこの日は終わったのである。

第2話

あれから1週間

水泳の県大会当日

俺はいつもの様に響と電車で大会が行われる会場へ行くこうとすると逢の親が会場まで送ってくれる事になった。

「ありがとうございます。」

「いいのよ！深夜君も響ちゃんも頑張つてね。逢と一緒に応援してるわ。逢も2人に負けない様にね。」

「うん。頑張る。」

「もうすぐ深夜の自由形の1000mが始まるよ。行くわよ。」

「わかってるよ。じゃあ行ってくるよ。逢も俺の泳ぎ！しっかりと見てろよ。絶対に1位になってくるから！」

「なら、なれなかったらジュースを奢ってね深夜。」

「えっ！」

「よかったね逢。1位になれなかったら深夜がジュースを買ってくれるわよ。」

「お兄ちゃん！ファイト！」

「深夜。頑張つてね。」そう言つて響は笑いながら手を振ってきた。負けられないと思った。

午前中は俺の自由形の1000と2000の予選

響のバタフライの1000と2000の予選

逢の自由形1000の予選

で午後はタイムが上位20人から上位8人に絞られる

その8人が全国大会に行けるというものだ。

そしてなんと俺は両方で1位の記録を叩き出した。予選だけど響もきつちりと上位の記録を残して午後の部へ午前最後は逢の自由形1000mだったので2人で応援に行こうとすると緊張しているのが丸わかりな逢がベンチに座っていた。

「どうした逢？」

「なんか緊張してきちゃって。」

と俺を見て逢が答える。

「そんなもんだよ。俺だつて緊張しているんだぜ。」

「私もよ。でもね緊張は楽しむのよ。」

「緊張を楽しむ?」

「そうだな。それが難しいなら・・・逢。両手を合掌して前に出して。」

そう言うとは逢は合掌して手を前に出した。

それを俺は両方から拍手と同じ様に叩いた。

「痛い。」

「でも緊張はだいぶマシになつただろ?」

「私と深夜もよくやったわ。」

「響は力込め過ぎでかなり痛かつたけどね。」

「それはその時に誤つたでしょ。」

「だな。」

「響ちゃんと深夜お兄ちゃんもこれやったんだ。」

「おう。やるぞ。今でも全国大会ではやるぞ。緊張するし。」

「こら!逢ちゃんの前で弱気になるな。」

「冗談だよ。それより逢。もうすぐ時間だろ。頑張れよ。応援してる。」

「頑張ってくる。」

そう言つて逢は走つて向かつたのである。

・・・

少しして逢の番がきた。

「逢ちゃんははつきりと言つてどうなの?」

「大丈夫だよ。上位には入賞する。でも8位以内は少し厳しいかな。だからこそ俺は逢にキック力と体力を付けさせた。」

「そういう事ね。厳しいのは技術面であつて身体能力でそれを補わせたよ。・・・それつて二年前の深夜そのまんまじゃないの。」

「当たり前だ!俺はそのやり方しか知らない! (?) / + * それに技術面はこの大会の後だ!」

「ホントに二年前の深夜そっくりね。泳ぐ時のあのゆったりとした身体を大きく使うフォームもホントにそっくりね。」

「見た目わな。でも技術はまだまだだよ。教えたい事が沢山ある。・・・逢の番だ。応援するぞ！」

逢の番が終わりあとは結果のみ

9位で予選を通過。

逢を迎えに行こうとすると逢が走って来て、

「やったよ！予選通ったよ！」

「そうだな。俺や響と一緒に頑張って全国大会行こうな！」

「そうね、逢。一緒に行きましょう。全国大会！」

「頑張る。」

こうして俺達は昼ご飯を食べ始めた。

午後の部は俺も響も問題無く1位で全国大会行きを決めた。

問題は逢だ。

「深夜お兄ちゃん！また手を叩くやつやって。」

「わかった。合掌しろよ。」

そうやって俺はまた逢の手を拍手と同じ様に叩いた。

「うん。頑張ってくる！」

「頑張ってきてよ！」

逢の番になる。

スタートは上々！

俺が鍛え上げた体力と筋力でスピードを落とさずに行けてる。

これなら全国大会に行けそうだ。

そしてこのグループでは1着でゴール。

結果の発表を待つのみ。

結果の前に着替えた逢がやって来た。

「お疲れ様。スポドリだ。」

「ありがとう。なんかすつきりした。これはお兄ちゃん達と全国に行ける気がするよ。」

「それはよかった。全国大会に行けたら今度からは技術面を教えていくかな。」

「技術？」

「そうだ。今までは体力とキック力を付けさせる基礎だけ。これから

はそれを活かすための技術を教える。大変だぞ。」

「そんなに?」

「大変だ。」

「逃げるのは?」

「俺から逢は逃げられるのかな?それよりすぐに結果の発表だよ。いい泳ぎだった。」

「うん!・・・結果が出た!」

結果はなんと5位で入賞。

全国大会出場だった。

「やったよ!お兄ちゃん!」

「そうだな。でも大変なのはこれからだぞ。俺もこれからは教えるだけじゃなくて技術面の向上をしないとイケないからな。」

「でもまずは全国大会出場おめでとうね。逢。」

「おめでとう逢。」

「ありがとうお兄ちゃん!響ちゃん!」

「あら。全国大会出場を決めた3人じゃない。」

「お母さん。」

「逢。おめでとうね。それと深夜君と響ちゃんもおめでとう。」

「ありがとうございます。」

「今日はこれで終わりなのかしら?」

「そうですね。・・・終わりです。」

「なら、帰りましょ。家の前まで送るわ。2人も疲れたでしよ。逢の面倒も見てくれたみたいだし。」

「お母さん。恥ずかしいからやめて!」

「あら。何が恥ずかしいのかしら?(・▽・)ニヤニヤ」

「逢が弄られるのを見るのは新鮮だな。」

「そうね。」

「それじゃあ帰りましょ。」

こうして県大会3人は無事に終える事が出来たのだった。

第3話

県大会から2ヶ月

全国大会を終えた。

結果からして俺は両方とも2位

響も一つだけ3位

逢には全国大会はレベルが高かったようで予選で敗退していた。

全国大会終了直後、逢は悔しかったのかオーバーワーク気味だったので俺は2回ほど逢と練習を休んだ。その間に逢は「悔しかった。お兄ちゃんみたいにメダルが欲しかった。」と俺の胸に顔を押し当て泣いていた。

俺は逢の頭を撫でて泣き止むのを待ち続けた。

ある程度泣くとすっきりした顔をした逢を連れてプールに行った。

「お兄ちゃんは何で全国大会でも上の方なのに私は予選で落ちたの？」

「どうしたんだ？突然。」

「羨ましかったから聞いてみたの。」

「そうだな。…俺は次の大会が小学生としての最後の大会だからね。逢とはかけた時間が違うんだよ。」

「私も頑張ったよ！」

「それは知ってるよ。逢に教えてる先輩は俺だぞ。それは一番わかっているよ。響もちゃんと逢の事を見ていたよ。」

「うん！・・・お兄ちゃんにとつて次の大会が最後なんだよね？」

「小学生残してうちはね。」

「なら、つぎは2人で1位になる！」

「おっ！いいな。でも予選で落ちた逢に出来るのか？」

「それは言わないで！頑張るもん！」

「そうか。なら、俺ももつと厳しくしないと。」

「うん！」

「なら、明日からスイミングスクールに復帰しようか。中学でも通い続けるつもりだけどもが一番教えられる時期だからね。」

「逢がここに来たら笑われるぞ。」

「それは問題ないわ。」

と話していると更衣室の所から

「響！」

と言つて森島はるかがやって来た。

「はるか。どうしたの？その水着！」

「今日は家から持ってきてきちゃった。深夜君！どう私の水着」

「なぜ俺に振る！」

「だって深夜君と今度ベストカップルコンテストに出るでしょ。カップルじゃないのにね。」

「それもこれも全て響のせいだ！」

「あら。なんで私なのかしら？」

「何が美男美女カップルだ！俺は美男でも何でもねえぞ！」

「これだから鈍感と呼ばれるのよ。」

「な！に！」

「中学でも・・・いやなんでもないわ。」

こうして俺は初めて自分が鈍感であるということを自覚するのであった。

第4話

あれから3ヶ月。

この高校はクリスマスに文化祭を行っている。

とりあえず予定は

- ・ベストカップルコンテストにです。森島はるか
- ・女子水泳部のおでん屋のお手伝い。(片付けのみ)
- ・逢を案内する。
- ・・・全部、女絡みだ。

女難の想でもあるのかね。

とりあえずベストカップルコンテスト用の衣装に・・・

「おい。はるか。」

「何？深夜くん？」

「なんだこの衣装は？」

「タキシード。」

「なんで？」

「なんとなく！」

「それで？お前は？」

「私？私はこのミニスカサントよ。」

「お前はアホか。」

「なんで？」

「スカートの丈が短すぎるよ！」

「えー！」

「響！助けてくれ！」

・・・

「何かしら？」

「「おわー！」」

「何よ。」

「「いつから？」」

「今よ。貴方達息ぴったりね。」

「冗談はよせ。」

「いいじゃない！深夜！」

そう言っってはるかが俺の腕に抱きついて来た。

「だからやめろって！」

「もういけず！」

「深夜。」

「なんだ響。」

「貴方ってやっぱりといろいろと鈍感よね。」

「・・・」

「どうしたの？深夜！」

「響。」

「何かしら？」

「はるか。」

「何？」

「俺ってそんなに鈍感か？」

「何を言ってるのかしら（よ）」

「・・」

マジか。」

「貴方って中学の頃も人気あったのにね。」

「そうなの？なら、前からモテモテなんだね。」

「俺がモテモテ・・・ありえない。」

「だから鈍感なのよ。ねえはるか。」

「うん！それよりも！深夜くん！ベストカップルコンテスト優勝する

よー！これで！バイキングの無料券欲しいもん！」

「やってやるよ！こうなったら優勝してやるぞ！行くぜ！はるか！」

「うん！深夜くん！」

こうして俺とはるかとはベストカップルコンテストに挑んだ。

・・・・・・・・ありえない。

マジで優勝するとは思わなかった。なんだよこれ。圧倒的すぎる
だろ。

「深夜くん！バイキングペア無料券ゲットだね。」

「おうよ！明日行くぞ！食べまくるぞ！」

「なんか目の色が違うよ。深夜くん。」

「そうか。悪い悪い。・・・そろそろ逢が来るから迎えに行つて来るよ。」

「OKだよ。」

「片付けは手伝いに来てね。深夜！」

「わかつてるよ。」

そう言つて俺は逢との待ち合わせ場所の校門へ向かった。

・・・校門に着くと逢が待っていた。

「悪いな逢。待ったか？」

「今来たところですよ。深夜兄さん。」

「聞いたぞ。この前の大会でまたベスト4に入ったらしいな。」

「でも兄さんには勝てないです。」

「おいおい。敬語なんで使うなよ逢。前みたいに普通に話せて。今は2人きりだ。オレもお前にそんなふう話し掛けられるのは嫌だからな。」

「わかつたよ。兄さん。」

「もうすぐお兄ちゃんは無いんだな。」

「流石に恥ずかしい。それに私だつてお姉さんになろうと頑張つてるんだよ。」

「知つてるよ。なら、今日はいっぱい甘えてもいいぞ。俺はこの後は片付けまでやる事が無いからな。」

「そうなの！なら、おでんが食べたい。」

「いきなりおでんか。いいぜ。」

そう言つて俺は逢を連れて女子水泳部のおでん屋台に向かった。

「あら！逢じゃない。久しぶりね。」

「お久しぶりです。響先輩。」

「響。おでんを1通り二つずつ頼む。」

「わかつたわ。700円ね。」

「はいよ。」

「私も出します。」

「あら。いいじゃない。深夜が出してくれたんだし甘えときなさい。」

それは後輩の特権よ。」

「そうだ。逢は甘えとけ。」

「で、でも。」

「なら、今度肩でも揉んでくれ。」

「深夜。おじさんみたいなこと言うのね。」

「いいだろ。人は皆生まれながらに老いていくんだ。」

「何のパクリかしら？」

「某赤ん坊が家庭教師をしている漫画だ。」

「なるほどね。」

「私を置いて話さないでください。深夜兄さん。早くおでん食べましょう。」

「わかったから引つ張るなよ逢。・・・片付けは手伝うからな響！遅れたら電話をくれ。」

「わかったわ。遅れたら今度ご飯を奢ってね。」

「なっ！それはかん「兄さん早く行こう。」わかったよ。行くか。響！

それは無しに」

「ならないわね。」

「ちくしょう。」

こうして俺の声が学校に響いたのであった。

第5話

逢とおでんを学校の中庭にある長椅子に座って食べながら話している。

「兄さん。」

「どうしたんだ逢?」

「兄さんってなんで水泳を始めたの?」

「なんでか?・・・なんでかな?わからねえや。」

「そうなの?」

「そうだな。でも今わかることは、俺は水泳が好きだぜ。他のスポーツも好きだけどやっぱり水泳が一番だな。」

「なんで?兄さんの水泳の練習って辛いよね?」

「だからかもしれないぜ。」

「どういうこと?」

「逢は辛い練習が嫌だと思うか?」

「うん。」

「でもさ、その練習をしたおかげで上手くなれるんだ。それならさ自然と気合いが入らないか?」

「でも辛いよ。」

「でもさ。大会で優勝した時の嬉しさに比べたら練習の辛さなんて無いも等しいからな。それに逢は小学生の時、俺がお前の担当の上級生だったから俺のやり方を知ってるだろう?」

「うん。」

「どうだった?水泳が嫌いになったか?」

「寧ろ好きになったよ。」

「だろ。水泳に限る話じゃないが練習はしんどいけど試合は楽しい。これが俺の水泳道だ!」

と俺は逢に話してから学校の屋台をいくつか回った。

時計を見るとだいたい片付けの時間が近づいたので片付けを始める為に逢と別れた。

「響、お待たせ。」

「いいタイミングよ深夜。」

「そりゃよかった。」

「あらなんでなのかしら?」

「響に飯を奢ることにならなくて。」

「その言い方だと私が大食いみたいね。」

「大食いというかファミレスにたまに俺の奢りで行ったら高いのばかり選ぶだろ。」

「いいじゃない。私と深夜の仲なんだから。」

「知ってるか響に。親しき中にも礼儀ありって言葉を」

「知ってるわ。だからしつかりと残さず味わって食べてるじゃないの。深夜の奢りって考えるとすごく美味しいのよ。」

「それはファミレスの料理人の実力だ。」

「まあいいや。さつきと片付けて帰ろうぜ。さつきからはるかから電話がうるさいんだ。」

「深夜がいなかったら今日も苦労するのは私だったのね。私の普段の苦労を味わうといいわ。」

「勘弁してくれよ。取り敢えず早く片付けよう。」

そう言っただけで響は急いで片付けを始めた。

30分ほどたって片付けが終わりはるかに電話をかけ直す。スピーカーで

「おっそーい深夜!」

「悪かったよ。で様は何?」

「そうそう!一緒に帰ろう!」

「響もいるぞ。」

「響ちゃんも。」

「私はダメなのかしら?」

「ひっ響ちゃん!もっもんだいいよ。(深夜君と2人で帰ってたかな。)

「はるか。今深夜と2人で帰ってたかっただって思ったでしょ?」

「そんな事ないよ。早く校門に来てね待ってるから。」

そう言っただけではるかは電話を切ったのだ。

「響取り敢えずはるかかって仲悪いのか？それとなんで俺と2人で帰りがかるんだ？」

「はあー。深夜ってやっぱり超がつくほどの鈍感ね。」

「なっ！」

とこんな会話をしながら校門に着き3人で家に帰ったのだ。